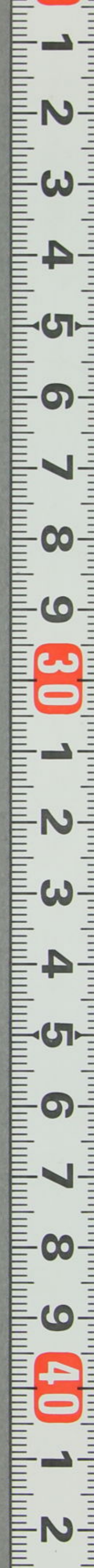




佛  
諸  
父  
之  
恩



5  
6630





へ5  
6630



ふりふりふりの昔市川  
才牛鹿玄名世にきりりしん  
二十七の月昔二月十五日との  
子辰もあはれきりすしり霊椿と  
吹折千来れ光法一時の  
羨とかりて元真に返る





此の秋氣を案れ芳ハ  
北志行りて吊く回に於て其  
子之哀父れ号を泣く每方牛  
之呼こや一之父れ遠忌法  
追ふく人こ孤句と需也  
向志一草こ泣く市に



中へ去りけりしと海に  
伏せしはけりしと世に  
首を垂ししと涙を  
と成感ししと心と接て  
去らざるありし

此の秋氣を案れ芳ハ



享保十五庚戌春浪苍舊德誌

今年正當二月十九日亡父才牛

二十七周忌也念香燃華尚以

不為足故恭請貴句佳吟而

為一集供牌前矣且以利那

之間孝養勿怠之心為心之戒早

*淡々*

写一得よ日記と遅い恩  
才牛齋  
三外

新十載集り此区なるかきさうら銭  
いまはれて八まはるひおぼろに  
源空上人

成佛や友誼のしるを八梅  
三年母  
尼榮光  
翠扇



たりちたふふれ橋三升妹買方に候市櫻

追若や外五帝十歳候樂て花たひ徳辨

楊花に千里車色の雲長し

分り治抑もむ枝も西文色ふ向梅

花や耳文色上十展轉文色れ文色

追悼三升

さゆ舊徳ふや年舊徳の雲れ舊徳白舊徳六舊徳泳舊徳ど

幸松白子力松白子ね松白子る松白子彼松白子年松白子梅松白子也松白子夜松白子の松白子面松白子

追善釋

花松巴の松巴名松巴と松巴佛松巴れ松巴山松巴名松巴め松巴古松巴白松巴哉松巴

春其雄雨其雄が其雄ず其雄ん其雄ど其雄む其雄し其雄し其雄れ其雄涙其雄哉其雄

亡夜月父夜月れ夜月名夜月り夜月と夜月防夜月風夜月の夜月白夜月哉夜月



歌 僊

ほろくしんくろ給有夜家名

沼洲

珠教のまき鳩の地出諸奴日

三外

春の冷し醜ハ枝よりと夜息を

青歳

款詠屋ーーーと思はれぬ家

壺月

閑の月一書後ーー楽少なき

来川

う  
小存子席に敲く可屋 咫尺

黒藁妻ハ袖なかり早に懐業者 吳丈

水寄進大子ハ杯口と生乳 玉丈

仔達此の妹の過子に怖う所 水國

孫小指寤の寝ぬれ夕香 蓮丈

書椒しほと海無口くはと 成屋







信濃一取て投ふから凍

吳丈

振袖て本は葉かた歌かきこ

玉之

夜無れ奢れ哺められり

來川

常鈍きてこもて暑屋拂

東里

夕月ゆきとあつとん

安士

蝦蟇の虫ゆて居るる淋

蓮丈

殘

歌と歌とも秋の空

貞佑

掃取れ風はかた子讀書窓

青峩

三男系足次男草足

三外

賣ての夜は去坂志抗声

沼洲

状日破布の頼系

忍尺

征絶寸括めてこも光り堂

成屋



涅槃の門に於ての茶の事

壺月

追福

年地を暮松の春少く布の堂

山夕

春の息春と有りて年成記

一漢

ふゆのふゆや土器供養のしと草

青峯

生食よ方より牛のる柳

負作

雲西に紋の親よいののる

恭室

世語のや魚籃のふもや塔の螺

成屋

算筆や招活と烟して供養のこ

沼山

ふゆのふゆは地をよの餅柳

水園

乞やまの遺教の古きふ

來川

茶の巻や園の川筋のふゆ

超波



同

鳥乳蝶のえぬ世れ教也供養佛

勢音

ふきも紅梅乃香といええい

仙水

海棠の寂ぬけは先いとむり哉

傘車

抱傳の智恵はき紋やいのる里

青峩

追遠

詔出香よしのかり梅齋

貞佑

雲も追うるははるほとむに

蓮之

せがし皆苦まハ早し路の臺

沼綿

追慕

汝の父小いにえくきもら香廻向

素凡

月のかの凡中に飛是の紋所

長水



遠予

詩や凡て二月の日向草

車員

橋船小唄し初子し彼を燈

雨磧

傍正の社をみ初まの燈を

吟夕

葉は空や寐をけれあふよ向塵

嵐朝

追懷

六のこ先子六の唱へや空を春

等子

それ二葉を懐むし一むりし

我兄

桐敷て根の脊れ平の飛

蟻子

太刀若と一見卒初梅の心

以中

金札の大福帳や法を華

放洲



亡父の用忌ぬりて木のほろり  
女供養をうけり

光度への梅の枝ゆきつてとく

ゆきしゆと似て

重しふ葉はもて友梅 百菴

うそ声もさるも大いなる 活寫

生海ろく強教一の至美哉 活魚

蝶のぬとのすに志くひり音の 十指

指はしや梅のすもくも都卒夫 可圭

悼古

尺一や世小初鳴れし西の空 和風

世の詠り梅香しや方百里 夜霜

十年八世しは境地志の兄 闇磔



遠忌

比二月五日、堆米、以、而、伽、羅、鳳、翠

故市川才牛八兒、幸、と、歿、補、して、  
世、中、多、世、子、三、年、次、て、名、残、  
鳴、り、ま、り、今、尚、存、の、深、廣、成、心

如、月、慈、父、廿、七、周、乃、作、善、小、こ、れ、  
女、所、の、柳、勺、を、こ、り、て、以、禱、小、  
劉、宗、謝、超、宗、の、殷、叔、妃、以、誄、以、  
以、之、を、以、鳳、毛、の、義、あ、り、事、成、  
絲、也、れ、類、を、香、し、ま、さ、し、と、  
吉、田、徳、治、州、の、席、鼓、小、り、ん



才牛一世に可なり一時葉下  
同く之を其の交友江都小松  
の江統を為りて其の七年  
時日戒名何守何の道に  
點鬼簿小訛去く胡又香飯  
備へり抄んて何事と云ふ

三升と亡父之に置きかゝるに  
元禄十七年と云ふ今○小松と述  
亡人七十余あり遠忌祭と云  
何事か彼君を夫とくをわが  
て四部の部人に其の勢を以て  
はるの石あり其の癖に云ふ



既句なりと想これの世の趣は  
昂に書の意にやまにせしむる  
をきかばいしてか入ふむしあ  
はさ平とや能はしむ事成つ  
ゆめめつらこの方の道に  
中へれたふはうひねりよく  
なりを

さむしと想くと心比おたふに  
をき  
とる先も飛つると新に  
目に  
らしむるをいふ事し  
れは  
やわくを情をいふ事し  
て  
あまの音律をいふ事し  
れは  
なりと平



ちかくのめろ居候を元元せし  
詞花言葉糸糸ちちくしとてか  
ころしとてしとてのちちくしと  
贈るしゆれりし小ちち糸ね  
ちち糸

元禄十七甲申年

俗名

門譽入室覺榮 古市川團十郎

二月十九日

増上寺中

常照院

其角

塗土紙乃父八子かや紙志多



元禄十七<sup>甲</sup>申年

正心院宗慶日淨 俗名 石坂東又太郎

二月廿八日

下谷宗延寺中

正理院

咫尺

此川上坂东古帝又雪解

寶永元<sup>甲</sup>申年

俗名

宗順院日耀 萩野澤之患

八月十九日

浅草新寺町

淨林寺 青峯

因於了之帽子以人目以拈捷



宝永二乙酉年

俗名

妙莊院普觀日門 小嶋平七

七月十三日

三田 藥王寺

教盛乃法皇の役也世に去て二十余年

沉詳

おの易く寂のまかしく魂灯籠

宝永二乙酉年

俗名

岸譽助給 右西國兵五郎

十二月九日

伊四子

長安寺 貞作

掃ヶや棟古之鳥 愕子 誠好 天窓







宝永五<sup>戊</sup>子年

俗名

心鏡院杏實日映 右中村七三郎

二月三日

本所法恩寺中

寶泉院

祐徳

弓流寸秘之猿又乃小彼存也

宝永五<sup>戊</sup>子年

俗名

智山常光 出来嶋半弥

四月廿二日

淡草八軒寺所

東陽寺

富百

智山常光乃此の如年書也此管



宝永六己丑年

俗名

通照院道入日念

上村花右衛門

正月廿日

谷中

長運寺

春耕

笈如く柏木く帯て作の良指

宝永七庚寅年

俗名

花容院清林日香

三尾木難波

二月六日

三田

藥王寺

釋

專吟

はまのくちや小角はれ粒の香量取

大の吟へ百く日追福の白く



寶永七庚寅年 俗名

廣受院宗林日記 葉山園右衛門

五月廿二日

淺草新鳥越

圓常寺 三武木銀倫里

橋や地より鳴るは 弾の五梨

寶永七庚寅年 俗名

儀山全勇 横山六郎治

六月廿日

愛宕後通

忠岸院 小樽大坂故一

蟬の外にはさくら有る声は



正徳元 辛卯年

俗名

願譽 願誓信入

小勘太郎治

十月十九日

増上寺中

唱泉院

恭空

壹斗入孫河原のや桐大楠

正徳元 辛卯年

俗名

明宗光還

小野川千壽

十月十九日

増上寺中

淨運院

星童

善心七化松之好時也冬松



正徳二壬辰年

智相明光

俗名

久松多三右

六月朔日

増上寺中

用宗 淨運院

小徑に十巖二

吾は之山んを色くうらむ向此其灌

正徳二壬辰年

深性理還

俗名

市川若松

六月廿四日

増上寺中

林宗 觀智院

市櫻

山茶花やゆきをくみ見葉賢



正徳三癸巳年

林翁淨清

俗名

村山四郎治

正月十二日

今戸

慶養寺

中川五卷

香に白丹前村八梅白

正徳三癸巳年

圓寶院玉山日登

俗名

古嵐衣世三郎

閏五月十日

下谷

宗延寺

安士

浮舟の如く女形ありて是を風



正徳三癸巳年 俗名

本住院道觀日法 中村傳九郎

十月廿五日 牛嶋 妙玄寺

- 一 船以祭八家のもの
- 一 及行舟也

一 拍子車名巻 沼洲

三 繁乃克 里を和ひけり舎式

正徳丑乙未年 俗名

正等院宗覺日成 花井源九衛門

五月十八日

三田

薬王寺 秋曉

三 子 一 あり 陈皮櫃の木はる之



正徳五乙未年

俗名

圓心院宗壽日量 中村峯之物

七月四日 谷中三崎妙因寺中 一乘院

園之奥にありて秀きも各市川より  
流し居し其中間小姓若元志げく世に傳て年  
老の外小女昼とくしりて行け其又志願する事  
有今三外慈父追福のはあて小女志とて  
此ひとくに佛のいそとてあまふはらへり

賢友香の六塔の宮儀年 羊鱗

正徳五乙未年

俗名

芝風柳岸 出来嶋吉弥

七月十九日

深川本誓言寺中

鈴閑院

琴助

一葉教げりくぬや琵琶入上



正徳九乙未年

實相院日了

十月廿三日

俗名

左近伊兵衛

谷中

長運寺

藤橋

口切や紗金結ひ乃衣裳御紀

正徳九乙未年

映譽飾運

三月十九日

俗名

瀧川吉平次

増上寺中

觀智院

菊丈

多路やらみり松の使者男



正徳六丙申年

俗名

真光院了智日信

古中嶋勅九衛門

四月廿一日

坂本入屋

知譽 感應寺

三十一漢

かほしすり牡丹もつと子二蓋堂

正徳六丙申年

俗名

玄淨院義進日姉

中村源之助

四月廿四日

雜司谷

本能寺

文声

樂屋てハ変成男子杜若



正徳六丙申年

玄休院日温

俗名

出来嶋玄五郎

五月十九日

法恩寺中 正運院

治徳翁の合歡堂古少長八否実  
店五節のことに一蓮の法恩寺を  
八町

合歡寺子の孫也す所の墓並に

正徳六丙申年

俗名

苔岸蓮暉

濱崎磯五郎

六月十三日

谷中 成盛泰寺

雲居寺上人瞻西洗純の弓雨と  
てをりしよ小かりを統む

玉文

夕立や守屋の法乃歌後



享保元丙申年 俗名

哲言譽本哲靈殘 藤田長九衛門

六月十四日

深川靈巖寺中 深照院

如長九坊の八名に於て一

翳此乃吾其流う才也

車声

風南小藝云方らじ約音呼

享保元丙申年 俗名

學陽善知 吾妻東藏

九月五日

谷中妙因寺中

一乘院 岸登

吾妻くくくくくくくくくく



享保元 丙申年

俗名

真行院淨立日信 西村弥平次

十二月十七日

法恩寺中

千林房

雨橋

又河服良菜口也苦笑ひ

享保二丁酉年

俗名

性譽真了

右市川團四郎

丑月二日

深川

正源寺

巴中

文光氏別増考り蟬乃所



享保二丁酉年

俗名

觀譽日星喜

鈴木平吉

十月十一日

靈巖寺中

正覺院

里郷

髪負賢かゆとはてはらるる子葉

享保三戊戌年

俗名

淨心院善教日順

村山平右衛門

六月廿日

谷中

妙福寺

茨鷄

多子月也水取は鳥家を好る



享保三戊戌年

俗名

實貝教院永遠日感 右録倉長九郎

十一月廿一日

谷中

長運寺

具錦

明六乃が補房ゆし 右乃是

享保三戊戌年

俗名

梅譽證山

右山下輕藻

十二月八日

淡草寺町光威寺中

栄林院

年々見也山入下り十二月

十町



享保四巳 亥年

俗名

馨譽言良薫

坂田湯門

正月廿八日

鳥越壽松院中

隆 宗院

富川

氷守子母道法丸丸俄解

享保四巳 亥年

俗名

心譽 助給

竹田源助

六月六日

橋場 法源寺

輕業也品阿也信之

山事源他心之好平

宗之

匠家之れ之精之る之返之る精也

舟



享保四己亥年

俗名

華屋順栄

山村惣左衛門

八月八日

浅草

天嶽院

兼月

元江

ふとははしき縁張しつふよやの籠繩

考下

享保四己亥年

俗名

真如院傳齋日教 早川傳五郎

十月廿日

本所押上村

春慶寺

門卷入室栄居士之所 延中九日  
福とちりれに世人亦年を経  
月ははつと忌日廿とくやみ  
りし候

名打と奇しうはつ日蛇の目傘

成屋



少下

多藏板本乾一冊序九葉上四十二葉九十五葉  
見存據此則至此為末卷市川九藏云云  
末為下卷也

須知此書... 早... 俗名

享保五庚子年

俗名

速譽得生

市川九藏

七月廿七日

淺草 天窠院

市川名六袖墨衣名市川三升音重名氏  
澹一仁嗔呼情式世所共知云云

曉雨

蓮花宮也、少下と市川、以字子云云



享保六<sup>辛</sup>七年

俗名

本住院圓理日了

大谷廣右衛門

二月十九日

芝金秋 正傳寺

見一世に藤神の役有り

藝菴投以人談祖と云

水園

おの元へ又庫を何と云谷箱荷

水園

享保六<sup>辛</sup>七年

俗名

禪壽院寶栄

大徳守田右衛門

六月廿二日

牛嶋 妙玄寺

倍子

此の元や此の寶具成此の経巻

二



享保六年 丑年

常信院了體

俗名

金澤平六

八月廿三日

三田 藥王寺

立山

神地秋初茄子ハ其真物

享保六年 丑年

俗名

艶月院淨慶

水木竹十郎

九月十七日

下谷

常在寺

宣道 松竹十郎 三つ 燈

來川

三



享保八癸卯年

清山

俗名

久松友右衛門

正月廿五日

下谷

常在寺

楓晚

一枚の篠ぬけの矢筈

享保八癸卯年

俗名

直到是心

石宮崎十四郎

二月廿五日

深川雲光院中

常籠院

今ハ昔ニテ清式部トシテ云流所リケル事ニ由  
小山ニ由並ヒテ名ノありけりト花叢本  
男に成りてハ名ヲ十四郎トシテ之内

梅子やあまのこに朝露の如く核

三升



享保八癸卯年

俗名

臨見譽言理頻

中川羊三郎

三月十七日

淺草光感寺中 栄林院

羊三郎少しよ小名向里仲中川

縣長川ととり流を

梁乃りちとりの名や為乃具

桃朝

享保九甲辰年

俗名

冷山院壽仙

古山中平九郎

丑月十五日

下谷

常在寺

惟子よ糸よ六位乃色乃主

和推



享保九甲辰年

俗名

心譽深空

袖岡政之助

九月十五日

山宿

九品寺

山夕

秋之老秋神懸小町ありきり

享保九甲辰年

俗名

智照院蓮心日境

中村竹三郎

十月廿四日

牛嶋 妙玄寺

琴平坂老古一車を名て

壺月

竹彈よりく音に調一也舞者琴



享保十七巳年

俗名

法山了水

深川小晒

正月九日

淺草称住院中

良狭菴

少長

言也又慮之傍之小簾

享保十七巳年

俗名

相譽一應理圓

三升屋助十郎

三月廿六日

深川本誓寺中

清心院

超波

口先之扱ひと深黄老の書

七



享保十七己年

聞法院宗信日受

西國兵助

俗名

六月十日

谷中三崎 長久寺

桑之畔の冠ハ兵五席之  
聖人白の姿小すまじし

訥子

おきハくしれくし鳥帽子友後

享保十七己年

俗名

心光院顯理日耀

中村傳八

十二月五日

谷中 盛泰寺

負山

戯て世に一体とせしめ給ふ立



享保十一丙午年

證譽哲吟

俗名

市川子團次

二月十二日

淺草 清光寺

若武者清情也

女

翠扇

葱  
之  
上  
か  
其  
回  
之  
多  
他  
花

享保十二丁未年

覺譽言成安

俗名

筒井吉十郎

三月廿五日

増上寺中

花岳院

友笑や又由方は無垢童丸

活山

大



享保十三戊申年

俗名

釋玄覺

水木富之助

五月十一日

淺草門跡寺中 敬覺寺

皇合十二段の半若

石後寺敷

三笑

人形如殘子像也且有面

享保十三戊申年

俗名

喜見日顔

嵐若野

五月廿日

谷中瑞林寺中

圓融房

風葉

吉人子了也具真娘郭公

十



享保十三戊申年

俗名

本立院道源

片山小左衛門

六月廿日

谷中瑞林寺中

是立房

薪水

結ら久也片山寺法久

享保十四己酉年

俗名

曜譽義顯

市川門之助

正月廿五日

深川本誓寺中

齡閑院

念佛すまひ

蓮之

山を之示者下し中長門之也

土



享保十四己酉年

俗名

了外宗智

百村山十平次

五月廿日

今戸慶養寺

先十平次為發し

宗智と改む

圓推

十徳の西地ゆり支考ゆ先

享保十四己酉年

俗名

秋月光運

出来嶋大助

七月十二日

増上寺中 威徳院

大坂ハ長壽のしりこ小倉

大坂ハしりの如き是れ類と成也

秋光の徳と考をくに百六つ

五舟

十三



享保十四巳酉年

俗名

至岸院松縁

山本松三郎

八月十七日

波草新寺町

本立寺

十七夜

惟光の股寺より早もや陰別也

白翁

市川竹之助

又采原長五郎門

袖崎縫之助

松本四郎五郎

尾上袖之助

篠塚新平次

藤田平藏

西村半九郎

荒川藤左衛門

松本善九郎

大面右衛門

市川源七

藤田十郎兵衛

右十二人者戒名年月詳小之次  
仍之俗名を頭一古人雪中菴此  
白翁よりくつ亡人談也



意柳也

嵐雪

皆 海也

茄子

之

右六十六葉

英一峰画判

贈覺榮居士二十七面忌

法蓮一章二句

きりくもや死て朽と忠告此下

何の傍の云日中に市川團十郎と  
いぬ力者ありや中華少く高船本位  
小真一画と信来りて見えゆくと長崎  
少多子以文母之先公先公の根立席  
成る一父の名を継て他の子と云ふ  
するも末有れば養を以類孝子成り

木者菴

湖十

古



冥加のきこふ向小揃もゆき自互

と物さしとにさるこいひしと物さ  
とさるの物さ

玉衣のきこふききりしと大根

審言の感さぬものも梨子藪ほる

一と物さしとさるこいひしと物さ

江戸亂の曲糸やむりし春丸雨

取十

永檄

露柱

月下

一層屋の吹く舞臺かど

土藁のこ向く物さるはる

涅槃舎の院起て明へ耳たさ

怒る後愁嘆はし一層も雪

光陰のこし守家の中照り椿

第日と二十七年の葉芥

郁文

右井

蓮谷

東里

立此

賀鳥

十五



嗒呼男風も彼屏の白ひりゆ

拾翠

才牛居士のを忌といきむに才牛  
俱小忘すすくよみと追思え

廓菴の牛は中來雪解か

晋如

光ゆふあけの秋の世十九日

圃盛

今も名といやハのこれね接る處

市南

蝶おや土器牙去酒さ蜜

魯文

のちろよや彼稻喜も不破の園

青璫

涅槃のうらと込荒事れ祖師系

麝香

々ことと白嘴アや名れ巻き

沼ア

福や遊ぶてとちやの梅れ時

仙星

吊 舊

云草や涅槃（山名）松花れ者

川楊



誰也知川乃一字也彼多舟  
 系子也也也也也也也也也也  
 之也又尾波能存也昔而作  
 彼多也極名也一初祖達大  
 三比津の屏風也乃之涅槃像  
 天上果波又乃凡中此紋所

調柯  
 維帆  
 橘下  
 字泉  
 銀枝  
 佳節

袖へ波電流是也子向之邪  
 今八者時宗男毒れ子乃粉  
 智恩院の一衣極也亦乃子而  
 追思  
 法乃門柳變一之喜仙去  
 彼多れ也く亦乃若り吹

素泉  
 周雨  
 五絃  
 魯石  
 文鴛

七



獨裁其各盤枕の涅槃像

其後

法之也常照院の若く先

片門前

即龜

跡を名は都卒ゆふし几中

徳守

安樂即寂光の文のくちて

今之名はく紫根の若く雲

羊素

見しや若梅ゆ一唱水は若

黒已

年古く一日橋ゆ寝れ声

其蒼

傍や地ゆまはくはく中流尾

超風

湯枝ゆはく詔ゆ芽之や成口は

琴松

残寸名にををくや涅槃像

芝帆

彼岸(遊)はくはく常光像

干露

涅槃像也追述所がふがら

文園



野集人作善

草の芽や彼存く世の四向 林山

閑帝の舎座も彼存く亦も割 峯叔

蕨もやろく思田舎も指を折 秀我

今之河と名も白く宿れ毒 柳紫

是と法坊も女も居加木哉 閑水

傳者も羨を里仙も割掲活 音雪

當東門に中日乃はうう如 沼魚

二十七面をこころのまゝ 桂星

門心らふ養を世も入る心も 桂星

はらうれも是れはまの法小 桂星

々とし控也とのを御法めし哉 桂星

丸

新 覺海



かきしめもえいふくのかげん

釈

泉阿

かきしめもえいふくのかげん

釈

雲蝶

かきしめもえいふくのかげん

かきしめもえいふくのかげん

羨韶

かきしめもえいふくのかげん

長

かきしめもえいふくのかげん

かきしめもえいふくのかげん

かきしめもえいふくのかげん

+



梅の香は 吹笛の音 夜風 弓張るれ  
みづにいと ちえのけり 花はぬはらけ仲の  
赤くも しのぼり ながえ くれとて  
夕の名 晨の巻れ ことば ことば  
日枝の山さ ほとり 言の上 控七も  
なごり ながれ ことば 福如佛

東より 元娘の牙に 新也控 たらちの  
一愛れ 信忠の心 下はとて

追福

常名や 継ぎ 継校の 年よ 向 浮葉  
七世が 乃 二十七才 湯離也 水光

同



香がしる草は塵にや指の  
大もやんれきととの情は  
互向や初雷は不破羽織  
西云二七に七し七ふ七心七其七名七と七彼七家七  
山の肩のりもや晴る雪解か  
常仙

追悼

世に朽ぬ金は海を佛に座  
志やうもものすとすに  
湊へく入おの帆も長深め  
追慕  
そめもやいはれ細く  
生成の教や不意の地の二月  
塵人



女衆仙の侍傍にを捕呼子多  
 於かみおせれ二月も滝入の松  
 耳あらし目らむしは彼を後  
 侍と立拜ふむし板木に巾  
 松明と柱如男世にありし  
 ちてせれと宮もひびきくつり  
 岷江  
 汲湘  
 黃鶴  
 栖鶴  
 沾耕  
 李喬

覚深信士衆に担云ぬる髪  
 姿深ええええ

むが給也二月の雷れ一色也  
 舟出に也あくし于公の門焚  
 栲の考小兒<sup>早ト</sup>牙<sup>ト</sup>けり指しとる  
 西云すしん彼君にほを袖あり  
 謚の這子と指さしらの海也  
 以席  
 石魚  
 照仙  
 文石  
 桃億



二ツ子し口以同しはるる相  
一船  
彼家也此名ハと日秋風  
撰居  
子うしてハ考れ物引ぬ向柳  
阮志  
磨墨沙ら天多連也筆防風  
露月

追善

名残呼ハんと名を二月井  
正子

菜ハ菜也日七口はるる境  
東岡  
あまのあまの名ハ長草者花ハ  
藤星  
色ハ名ハ根引ケ玉柳  
中和  
心孝ハ種有来也墓ハ  
三同  
折中  
折の是昆布ハ葉筍ハ作名也  
左右

廿



思以香燭燒香以寄楠の芽  
尾谷

悼覽榮信士  
此章初七回忌之作也今載之  
荷葉

念佛念經頭孝誠  
今朝新起幾愁情

墓邊春入苔痕綠  
萬里口碑身後名

悼市川氏之亡父二十七回忌之辰  
為呈一章  
一二三

二十七年遇忌辰  
濺花淚雨武江春

衆人皆謂父如在  
孝子名高名實實

追悼  
三江

英名震四夷  
技藝稱寰奇

嗣子非群器  
繼基不可疑



謹祭故才牛居士廿七回忌辰 東海子

往事淚痕春夢回 戲場獨步棟梁材

胸藏風月功名重 勢辟山河雄辨開

二十七年埋玉樹 百千萬劫坐蓮臺

誰言君駕白雲去 閑在至今觀異才

悼門譽入室覺榮雲廿七回忌 五舟

中興冠一藝 入室覺榮名

非使忠臣感 實具搖孝子情

梵音黃鳥靜 法味白梅清

二十餘年古 吾徒隔死生

敬祭



遠忌

遠忌や 祝ひ梅は 詠言

水水れ 柳の 影 柳葉の 影 丁固

春斗 花も 乃大 蛭 翠石

井々 春斗 春斗 春斗 春斗 春斗

春斗 春斗 春斗 春斗 春斗 春斗

春斗 春斗 春斗 春斗 春斗 春斗

弓小 弓小 弓小 弓小 弓小 弓小

共 共 共 共 共 共

一 一 一 一 一 一

減墨 今山谷 帆江

奎紅 古市川 又魚

也 也 也 也 也 也

春 春 春 春 春 春



粘膏の種まく衣しを實をれ 喬谷

そのまきゆ

山極をく佛と云出しぬ 乙中

柿の井田し土中ぬむし外 初立

鳴やまを云と云葉も梅の法 又鱗

梅の香や彷彿としてとに花 滑石

梅摺れむが功 葉葉うね 殘杏

散しても梅はははと梅うね 松風

照り梅の素袍起ゆさ緋衣 轉々

今や世に半く梅小苔思ひも此梅 天滴

苔蔭おと孝ハ守りくあゝ至 杜人

蕨渾の乳のこれぬ梅は居 雨塊

六



追福

兎目乃滝小不動の杉はら乾

松羅

船歌や二十七里は彼存宗

角調

江戸着板の祖師地はうた

相橋

女さうさや鄆縣うた系物可

竹止

名木八株うたはな彼存友

友以

燕や八月蓋長者の供養

河東

志道也や古木は林乃三九年

推車

百合着と思ふ海苔は衣の如

橋中

衣更着や海は磯志蝶千鳥

山寄

二十余年々葉すまを揚明命

吳大

悼舊

其



菜花也や見下し各州に詳列記 逸志  
涅槃會也傍半坐望六卷亦有 未尔  
名也あつて彼存小分其根也 嘉裔  
阿死漢の形と少かき梅は也 乙磨  
子向とや名はとありし橋乃菜 三中  
後身ははれと橋小形とあり 夕丈

南はつと無し阿弥が世やを臨 文文  
王氏かゝるはし奥との二月橋 蘭洲

慕遠

榮葉亭

今に名を量るる女に衣更も也 冠子  
さゆら支や涙よ奉れ世も危 藤橋  
名はこゝの梢の葉や二十七 白羽



縮妻元祖の織や彼存雲 圓推  
 彼存嘆極井の書や世二冊 三笑  
 享保十五極と世若法の市 富百  
 兵に丁に存残し一お粉に刺毛 星御  
 木はくは志出終る治と梅種式 宗之  
 大右の八鞘へ入日乃彼存うね 楓晚

取毒やういさ六教と岡伽の水 喜者  
 後とて若とに明くふ向う船 潮雨  
 喫て尺よ三舟の祖師と粉衣 倍子  
 日和式是し師の居彼存居 銀翁  
 方佛ハ持まておしや涅槃像 少長

法多れ家と忍忍る小成田屋とや



阿弥陀佛之御成田とも云ふ御一

三年改めぬ香の及二十四番の風吹傳  
やうきものゆる香へしを敷へりハヒ

父の及小巻を敷吹年回向 買方堂 何江

くくくくや年と年とくくくく向物 何龍

橋巻二十七年屋作 何文

雨と雲被屋橋もくくくく 沼津

アサキ二佛と名のく春の夜 古洞

彩色乃一昔繪うね東福寺 儿杖

みとり子れとくくくくやあつ草 水平

むくくくく復く杖茶のく物 朝葺

替る世や六糸ぬひ被屋 凉市

柄教て柄も襷る江戸家 英子



遠市

春うらやみ十口遍のあ彼存

桃朝

侍ふまるとめ三斗はに戸核

我常

ほくしそまゆ色を根来枕

五粒

春ぬや略し八傘は侍来途

笠子

日にあふ木枕かきし雲は夏

帆夫

まよぬれ総の若さをしそを登り給る

瑛水

彼存へ彼篠塚の追風う邪

是少

稻妻や雲れ万枝ゆら下

巴十

むらり〜程筋人の外目哉

雲什

又牛若士と予う七父八膠漆の友なり  
忌月忌日とある小二月十九日なり

あまや月と雲れ日と昆を鶏十可



六人かや二月のまはる粉魂起  
 薪水  
 梅枕公平年れ涅槃の非  
 杉曉  
 吾松のまを也こさる繩簾  
 八町  
 光陰ハ野毒を白く竹も  
 琴助  
 此れ色ハ不戸ぬ海を未開に  
 魯風  
 その年ハ延慶の候十九日  
 竹旦

心身ハ高たらすや梅甚  
 富八  
 彼尋代若狭宿るむし人  
 尋山  
 世中情交白ひやと也家行  
 丑帆  
 羨まきの外水西ひ祿出に  
 瓢下  
 名喚やよ西のむのうんま  
 岩久  
 焼香やむかしくり油れ梅  
 一公羽



彼存風葉のく守福列師 萬水

雲石や志ほくくはくく名 貝錦

和懐の世にちきろ懐の 貝錦

名をふく天福懐が後此蝶 訥子

懐古

衣更表や繪して今て衣の長はら 文雄

年也日とと系はく福て柳か 釣雪

耳地知その日西此和 桂 芦洲

紫此西云へてけと山くくが 玉声

行返る形やほをぬる墨衣 菊文

昔も也や方我を鏡のぬむじ 文系

姓名の秋之御やと雷解川 沾車



名ハ夫にありぬ二月九日梅外  
 路光  
 法の日やをくしくや等々  
 紫友  
 敷て後櫓ともなる様うね  
 一文  
 花の香ハすをち入りぬ門破り  
 郁木  
 古より後をすすちちの月  
 初朝

歌僊

柳をくをありほくくの一の舟袴  
 三舟  
 二十七年やうり衣文若  
 十町  
 ちくくやほくく小燕すちち  
 謝子  
 板子或櫓小投てちち  
 五舟  
 ちちの舟に成まに残る舟  
 沉詳  
 破る舟の中ちち黒核  
 故一

三ツ



う

狭眼て獨て角力取あふ

十町

泣子以速て空を掃

訥子

玉子以多とこ入と久たれと

五舟

恥志く波く川を掃除

三舟

月涼く大木をぬけ蓋あて

故一

女の声て庵阿謨伽吐噓

沈詳

千あうきあけりる迷ぼり月

訥子

鳥ハ寂れきたずり也

十町

篤信ゆ長生盟校考りて

三舟

如くまハ限千是ハ盡漬

故一

極ゆハ誰あらし此喰ひ近

五舟

他あらし鳥けり實永の

沈詳

三



名

蝶二つ妹の洗ひし等すくそ

故一

髪は後ハ洗ひて垢をびら

三升

とこりしは髪ハ榮螺のきり

十町

布のすり等ハ雪隠てきん

訥子

綿のをの扱ぬハ水はく部公

沈詳

松もむがし此因姓爺領

五舟

鯛しと思ハ懐て足れう

三升

玄関へ及ん糠ハその分

故一

衣は所のよい存着ハ水はく

沈詳

月満こし水の境目

十町

鏡るの化身なるよし水はく

五舟

暖簾に鈴をばし

訥子

三升



残

切火やそ老小のそが小箱高飯 十町

祭白のよ柄籠波うん 三升

踏すもろつてるしそ強ちん 訥子

鍼て活とどき向と一僕 沈詳

打まに衣れ神う皆かしれ 故一

小の佛祈七十九日扱 五舟

### 華浴

其角例のりき給小才牛の鐘旭の所作を  
画岡寸孝子三来ぬうひめをこころし  
予に他よりねく語りてふを信見え  
むらうしを忌小つらうあふよ白地  
一章とをす

化苗齋

世小唱一鐘旭の心立也いの身 仙鶴

此是我世の名都鄙小芳一合に



三九礼祥忌小の巻河述事冥福と  
追ふよの物

九天小初く三つれ 苍車 箕盾

三九礼の巻むせが 沼戸也聖書 芝蝶

初之式赤ゆ六松れとより 立 寸糸

名残石に残し

旧苔漬洗小候や 吾れ果 可幸

意同忌の 一 初 (P. 6) 名に  
はつ六一 物り

とやいらん 吾れ 敬雨

園賣比をまかきんと 子西物りハ  
むかし ちりり 三升 孝子  
亡爺 三九礼 志 追 善し 初の  
宜事 せし 祓 夕 浴 索 小 じまに 撰 取  
不捨の 金 文 物 ち 家 び 乙 乙 中 也 感 候 也  
袖 小 と せし

④ 一



九品也 三徳山に身をまかせ

悼歌齋

信安

三升子に七父消えあはれて

紫の石ゆえんもまよひ草

金毛

追福

かき流すや六田は流るる板

水色

くもりて見れば舟の楫は船の舟

如臯

衣は梅もや古き七光利

蘭室

世の父はあはれ花も春

松峯

浪花

難波の梅をかをればまにまに高んとい  
くもつなれと去此不遠とかいへも

十方の心なる三升花鏡

黄玉堂

星虹

市川のま其名の指ふてせよるも



かまひとや〜と女芸所作の歌は花  
々か枝葉の久きものよ〜と嘆る  
去る娘いぢの人のとてさびし

去る小むし〜鈴屋根回らん 芳澤 春水

亡主れ詠者彦才牛と呼八五十年  
余以希七夕の打言よ

市川因十郎  
伊藤庄太丈

世時〜と傳へかて

ふら〜とややがりの星流流祿秋 長谷川 千四

市川の何某親小布〜ね地は各の達人と堂  
亡人の二十七回忌と二集に顕すとて〜

此れ種々照はは〜子粉菊 賀子

市川氏廿七回忌とて〜小上千こと  
世にかい〜れ〜と宴に吐 吟松亭

藝云れを今と世上ハ花〜 里曉

見せ〜やを親めも二月風車 寺田 耳霖

三



とらへ二十年余れ老入凡

松田

佐國

追思

千代野のうが箱けけせて梅月

竹田

卜童

百里来ゆせり文ハ芦れ芽

三升

ひ下れ強き智ひゆもろ海りて

翠扇

遠思

我れ其塵粉も高き花蝶人々

南都

梅七

前麻比申にその名やうきけりし

白河住

室奥

とらふも光陰れ去の之象うね

吟松

二昔もやとさうさや十九日

鴛子

子梅れま向くおちやお海らう衣

玉宇

荒杖や石山深き比類を

菊人

四四



元禄七甲戌の年亡父才牛京師小  
寓居より時所親供れ句あり今  
幸よ追悼一集れ巻末に才牛  
載且夏秋冬の句を加て白紙  
遺吟とす

才牛遺吟



御影供

はらる

ゆをぬくを

才牛の風

才牛

才牛



伴勢物語

烏帽子

才牛

着て

平

遠く

いさ

半

十郎慷慨愛於菟

血氣武人犀甲軀

妾婦當時誓星否

隕成此石似望夫

かくれ家 秋海棠北虎 法分

才牛

四五



十月 蟋蟀

入我牀下

打牛

三三三

三三三

牀のこゝろに

おんこ

おんこ



追悼

世の梅の教へて書法のかゝり

笠翁

歌仙

思ひ井の虫言念佛共

蓮光

鼻舍利小若の薪物

三升

三升



鼻利に月夜の梅津打真ッて

全木

笑小寐おちぬくに去風

蓮文

かゝる下戸も旅ぬかきりきり

全

時雨も庇霰も庇

三升

よに捨て命松凡ハ有はけりき

全

白ひ袋述狎くハ出ほ

蓮文

玉女墜瘡血をみり星からふ

三升

母乃声ぬきく大さ(家)を人

蓮文

深川の地を菩薩ぬきく(心)

三升

羽衣笑ふ(後)の阿つる日

蓮文

月地残る名のと浮橋市市常

三升

髪(一)煙と先らお角力

蓮文

の



菟菟とを今叶にね安安世界

三升

度以の年ハ何ぞか

蓮之

元日ハ小澤存りしをハ軸

三升

下に寶引の腕の強由

蓮之

<sup>名</sup>長深さの林ゆくの標から

全

言路らぬ日ハ承り承り

三升

櫻のきて喰ふ支よハこちん

蓮之

子れがさるくとさるは

三升

年まかりとるし寝る世さるは

蓮之

海の家は然思ふと川丁

三升

舟松と小傘ほとわハ秋の空

蓮之

熟柿が錢を借るう柿

三升

四升



席がうゝ無月夜にて善光寺

蓮之

吉祥天女を名とて云ふ也

三升

忘るがよ炬燵で裾の焦る事

蓮之

大の木のこけ目一乳と云ふ

二升

沖舟のちしきと云ふ雷雲

蓮之

賭小波さうあはれハ程塚

三升

お袋へお袋がしと云ふ

全

多きと云ふ川や十九二十

蓮之

頼りくお家の残る花の多主

全

夜とてはつたよれ程楽極

三升



吊故才牛辞

孝子悽愴の意ハ春は霜降履れ謂ふ所は  
花乃雪を踏て少年老丈男女をいふは月  
情うはさけしむと十日のまら九日といふ小  
ちり春也が其因忘年回毎小三升父は  
家石以起して既小二十三回忘に凍子升と帝

祖父の返若きを毫らさむ女のほは(いふまに  
実佳名小張好交鬼れあまやけりてやう  
さひをいひあは其笑語聞のこくちり好屋  
を以其嗜好のたより小今追悼れ秀吟  
改集てね真するこの其心をさしり  
難波舊徳の門才たれを才牛其表徳之

詩歌連誦



父六十翁 法名淨喜 母八妙壽其先院則惜谷  
村に富農生く塚越氏とや志からに十翁  
耕牧の業以兼ひて任使の業以兼し肥壤に  
総別以去て其才小穰也繁華の江都に生り  
任事の時ニ萬治三年庚子和泉所かりて  
才牛以生やと章名は老翁知り性妓藝に

ゆゑに因て奴家守令市川因十布と称す  
父任使の勇氣と交て荒事と少少は後  
同き事紅粉と以て遍身の塗三年は禪の  
大を力の丸れ小くも其比の離れを以  
時代ねえれ後小は組大のりともは亦  
事皆才半とて始りて實小藝業は太祖



新す處一々々世に安んずるの祝物也正月  
に大カニ升の銘と年三一一牧給製法  
蓬艾唐錦の華紋小ニ升あり其名  
唐土の機婦亦及一上邊鄙の嬰兒也  
固十布とともいへんは揚兵の事也  
知らず和漢小なりと父の容貌と在り

トくそと半親小似るとも樂居れ大鏡と  
に父れ半澤存すも小其遺體法年此  
矢れ根小磨交て曇云如と事わはれらる  
孝情なり此孝情因る所故也才牛此至  
孝ハ既小世も知る所也澤喜言り樂居  
来れも願也此の法還へて小列様交小



つれを賢くしめしむるは念候は問ふに在ハ  
出入り面しむるに室を暖むる故小又  
他人敬しむる事多のせしむるは是  
才牛の敬養をまする故や三升又又を慕ひ  
今もくしに後より恨むといふ事小  
慈母に存するは喜ひ昔々者哉と廢せ

はと今三升志候継ぎ功の成るは復し  
追慕れ孝情と感するは小おのけし  
同橋の笑ひはうらさる事しはしや  
一白

大利なる事や甘き事しは小おのけし  
相葉園  
白翁

辛夷  
子あ



不捨  
苦菜之根不捨以雪解渴也  
三外  
廣寺此菜書以廣其  
文邑

追善

蓮の根や納糸糸と種札  
吟枝

小牙橋女考公女正月  
翠扇

若雀妻女毛衣女着好く女有之  
市櫻

追加 梓工過羊成之後到來仍載此

室息二十七年仿於當時小

有丁万民乞河賞款次

京  
巴人



石

追福の佳作凡三百余吟、実小口称念仏  
等し、これに歡喜踊躍して、此乃一集也  
靈前也、具へ且又俚句、以て二十七回  
忌辰に、結願あり、意次述

嬉々卷

佛とハ氷に風、其和訓、之邪、三外

先考市川門、譽入室、覺深居士ハ  
推中、又麻門、小所、ひして、文牛也  
い、了、其、一、子、九、名、の、備、う、衆、ち、也  
此、云、於、此、よ、う、し、け、増、し、寶、井、其、爾  
の、終、小、上、り、て、之、外、と、名、を、亦、亦、小  
う、り、想、念、を、き、り、し、也、年、の、中、に、没、好

五七



合歡堂に親しむ娘のふしと又  
平一母とに父の幼状とありひ  
莞尔として歎詞供ににん云に  
少子居士とく一庚戌春延地  
十日二十七因河とありひ毛為に  
伽羅乃白河とありひ歎佛八十

八種流産ははしとて外五布成長  
和と新世し教中終と河延波  
乃笛翁詞集とありひ江都紀輯  
集安叟と

享和十五年丙寅二月廿九日



享保十五庚戌年二月十九日

一筆岩上舟採筆

彫工大久保一富

...

1/1



